

第1限

2026 年度

全 国

国 語

現代の国語，言語文化

〈近代以降の文章〉

1. 開始の指示があるまで，この問題冊子を開かないでください。
2. 机上には，受験票，黒鉛筆，消しゴム，時計以外のものを置かないでください。
3. 受験票と机の上に貼ってある受験番号が同じかどうか確認し，問題冊子と解答用紙のすべてに受験番号と氏名を記入してください。
4. 解答は，すべて解答用紙に記入してください。
5. 試験中に問題冊子の印刷不鮮明，ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は，手を高く挙げて監督者に知らせてください。
6. 不正行為について
 - ① 不正行為に対しては厳正に対処します。
 - ② 不正行為に見えるような行動が見受けられた場合は，監督者が注意をします。
 - ③ 不正行為を行った場合は，直ちに受験を取りやめさせます。
7. 試験終了後，この問題冊子を持ち帰ってください。

受 験 番 号	氏 名

問題は **一** から **三** までで、一ページから十九ページまであります。確かめなさい。

解答は解答番号 **1** から **24** までにマークしなさい。

一 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

記録に残る最古の医療である「手当て」の姿は、宗教儀式の中にみることができる。それは紀元前4世紀ごろ、ギリシャの医神アスクレピオス(Asklepios)による治療の図像が最古の記録であるとされる。当時の人々は病気になるのは魔物のせいであると考えていたため、その治療も儀式的な行為によってとり行われていたのは当然でもあった。

このような超自然的な治療が行われていた一方で、ギリシャ時代になると一部の医者は客観的な治療も実践するようになっていった。その中心となった医聖ヒポクラテス(紀元前460(377)ごろ)は、「われわれの体にはもともと、健康に戻そうとする自然の力^{注1} *Physa*があり、医者はそれを助けるのが任務である」と述べ、自然治癒を重視するようになった。その方法は、食事、薬物、沐浴、マッサージ、運動などであったという。薬や手術道具も十分でない当時の治療は、現在でいう養生のようなものが中心であった。

ヒポクラテスは魔術や神聖な儀式を排除したが、特に「触れる」行為を重視していた。それまでの儀式の中の触手療法に代わり、理学療法のようなマッサージを重視した。彼は「医者たるものは医術についてのあらゆる学

理とともに、マッサージも修得せよ」と力説した。

科学的な医学を追求してきた医者にとって、患者の身体に触れるのは、症状の情報を集めて診断するためであった。いわゆる触診である。しかしこの触診の伝統も現在では廃れてきている。

科学的な医学を追求した医者は、19世紀まで、病気に特異的な身体の異常を捉えるため、視覚的・聴覚的、触覚的な感覚を駆使して、できるだけ客観的な証拠から診断するというヒポクラテスの観察法を追求していた。医者は病理的な知識の深化に伴い、器官の形や性状を知るために身体の深部まで手で探り、一方で皮膚に触れた振動や擦れ合い、感触の微妙な変化を手で感じ取ろうとしていた。

しかしそのような訓練は一定の成功をおさめたにもかかわらず、それだけでは十分には情報が得られなかったのも事実である。そのため診断は患者自身による症状の告知にほぼ頼っていたが、それさえもあまり信頼できる情報とはいえなかった。こうして医者たちは器官の異常を知るためのもつと信頼できる手段を追い求めている。

そんな時代、1816年にフランスのルネ・ラエネクが筒型の聴診器を^{注2} 発明すると、医者はそれまでの患者の胸に直接耳を当てるなどの感覚的な判断や患者の告知を、客観的な情報から区別することに初めて成功をおさめた。これは近代化されたヒポクラテスの観察法への大きな一歩だといえる。

こうして医者は患者の内臓について、より正確で豊富な情報を得ることができるようになり、肌と肌を介した診断法に^{注3} 終焉を告げた。しかしそれは同時に、「肌の接触こそ、医者にとって、最も古く、最も有用な癒しの技」(エドワード・ドナル・トーマス、1983)という、太古の時

代から続いた良き伝統の終焉でもあった。患者は医者にみられることはあっても、触れられることは少なくなった。

これにさらに拍車をかけたのが、ウィルヘルム・コンラート・レントゲンのX線である。これにより患者の姿を直接みることもさへも不要となり、患者不在の医療へと突き進んでいくのである。

こうして科学的な医学は、患者よりも患部や細胞をみる方向へと突き進んでいった。

残念ながら現在の科学的な医学もまた決して万能ではなく、批判的に論じられることもたびたびあった。たとえば日野原重明は、医者はサイエンスとアートの両方を身につけるべきだと主張している。サイエンスの部分とは、医学的な高度な知識や技を身につけ、患者に共通する部分を客観的に捉えようとする側面である。それに対してアートの部分とは、いわば感性の部分であり、一人一人の患者の独自性に目を向けて科学的な知識を適用することをいう。アートという言葉は、すでにヒポクラテスの時代から使われていた用語である。「アート・オブ・プラクティス・オブ・メディシン」といえば、悩み苦しんでいる人の痛みをやわらげ、心を安らかにするために、自然治癒力をどのように上手に引き出す援助ができるかというすべをいう。患者の悩みや痛みがわかり、感じられるというのは、医者の側に感性が必要である。医者は自分が感じたことのない痛みや苦しみを感じられるようにならないといけないのだ。このような感性は、まさにヒポクラテスが試行錯誤で追求していた、X 患者の状態を把握することによってこそ、感じられるものに他ならないと思う。

ことは医学とともに歩んできた看護でも同様だ。

看護において患者に触れることの重要性を主張し、「TE・ARTE^{アールテ}」学を提唱する川嶋みどり^{注6}は、次のような実例を紹介している。

「最近の看護師は、自分の言葉でまず苦痛を確かめたり、手で触れてアセスメントすることをしない。『息苦しい』という訴えを聞いてスツといなくなってしまう。しばらくして再び現れると、ワゴン車にノートパソコンを乗せてくる。患者の指先をプローブではさんで、『97ですね。大丈夫です』と、サチュレーションモニター^{注8}のデジタル数字だけで状態を判断するのである。しかし、たとえば97であれ、98、99であれ、患者が発した『息苦しさ』は変わらない。何が大丈夫なのだろうか。背後にある不安やとまどいに対するケアは、皆無といってよいのである。この間の患者——看護師関係の何と無機的なことか（『看護実践の科学』2009年）

まさに「手を出さない看護」である。患者の訴えよりもデータを重視する風潮が端的に表れている。

ここで、患者に触れるという看護の原点について考えてみたい。

「看」という字は「手」と「目」で患者を看ると書くように、看護における手の重要性は測りしれない。

その点を巧みに表現したのは石川啄木である。啄木は肺結核のため、27歳の若さで亡くなっている。

思ふこと盗みきかるる如くにて、

つと胸を引きぬー

聴診器より。

入院中の長く苦しい闘病生活に耐えかねている啄木を回診した医者が、聴診器を胸に当てようとしたとき、「苦しい治療はもうやめたい」、「家に帰りたい」などと思っている心の内を盗み聴かれるような気がして、すつと胸を引いてしまった、ということである。

その一方で、次のような詩句も残している。

脈をとる看護婦の手の

あたたかき日あり

つめたく堅き日もあり

(上記2編『悲しき玩具』より)

聴診器のような当時のハイテクな診断機器は、得体の知れないものとして思わず胸を引いてしまったが、看護師の手による触診では、その手の感触の違いを楽しむ余裕さえうかがわせる。看護師よりも啄木の方が接触到敏感な感性をもっているのだろう。

同様の思いを、正岡子規はさらにはつきりと指摘していた。正岡子規は明治35年(1902)に、35歳の若さで亡くなった。彼の『病牀六尺』^{びようしよく}には次のような一節がある。

病気の介抱には精神的と形式的の2つがある。精神的介抱というのは、看護人が同情をもつて病人を介抱することである。形式的介抱というのは、病人をうまく扱うことで、薬をうまく飲ませたり、包帯を取り換えたり、背中や脚をさする、布団を直すといった行為の他、浣腸^{かんちよう}や沐浴など患者の身体を常に気持ち良くしてやることである、と述べている。そして、この2種類の介抱の仕方が同時に得られるならば申し分ないが、もしどちら

かを選ばなければならぬとするなら、むしろ精神的同情の方を必要とする、という。

精神的なケアをより本質的なものと考えていることがわかる。

これは看護師の感性が相当鋭くないとできないことである。ただ同情すればよいのではなく、患者の状況を本当に理解したうえで、その痛みや苦痛に共感するわけである。

先に医療における触診について述べたが、看護においても同様である。

手は患者の身体内部の状態を知る極めて便利で正確なツールである。3本の指で脈拍を数え、触知して性状をアセスメントする。触れた指から、体温の高低、皮膚の乾湿の状態、血圧測定をすべきかどうかとも判断できる。

脈拍だけではない。先述の川島によれば、エキスパートの看護師であれば、患者の胸に当てた手で、分泌物の有無を知り、咳^{せき}の種類が湿性か乾性かも把握でき、腹部を触れば、ガスの有無や便の状態も観察できるといふ。手の触覚は極めて精巧にできており、さらに経験を積むほど精度も高くなる。血圧計などではそんな技には遠く及ばない。

現代の医療・看護において、「手当て」の重要性を主張するのは、ヒポクラテス以降徐々に変貌してきた科学的で分析的な方向に偏りすぎた医学の流れに警鐘を鳴らしたいからである。だが科学的な流れを止めて原始の医療に戻ろうというのではない。手で触れるだけで魔法のように病気が癒えるなどというまやかしはもはや通用しない。そうではなく、患部だけではなく「患者」を医療の中心に据え、体だけではなく心を含めた全体としての患者を「癒す」方向性を取り戻してほしいのである。そのためには患者の苦痛を拭い、「人間である」患者との関係を良くするために、医者も看護師も

もつと患者に触れる必要があるのではないか。

しかしことは医療場面に限った話ではない。世の中全体で人に触れることが圧倒的に少なくなってきた。その悪影響は現代に生きる私たちすべてに当てはまる。

何となく生きづらく感じたり、生き生きとした感情を失いつつあるとか、疲れやすい、不安が強い、イライラするといった多くの人にとって、手当ての技は大きな助けとなるであろう。

さらに人との親密な関係を築いたり、社会の中で必要とされたり、人との緊密な関係の中で生きたりすることができにくくなっている世の中で、手当ては人と人との関係を築く効果的なツールともなる。

現代によみがえらせたその効果は次の2つである。

第1は「癒し」である。

科学的な知識もほとんどない古^{いにしえ}の時代でも、人々は手当ての癒しの効果については経験的によくわかっていた。だからこそ四大文明のいずれから、マッサージが癒しの技として登場し、近代医学が発達した今日でも衰えずに生き続けている。人間の身体の基本的な構造が変わっていない以上、手当ての癒し効果も変わっていないはずである。

一方で、科学としての医療は「いちごっこ」のように一つの問題を解決するや新種の病気が生まれ、私たちはいまだ病気から解放されることはない。この先もずっと「いちごっこ」は続いていくに違いない。そんな医療のもとでは、人々は「治療」よりも「癒し」を求めるようになった。

私たちはなぜ、それほど癒しを必要としているのだろうか。

その一因は、心と身体が乖離^{かいり}していることである。私たちは毎日の生活

を科学技術に囲まれ、それらを使用しているうちに、いつのまにかそれらに支配されるようになり、知的合理的側面ばかりが偏重される社会の中で生きている。

しかし人は合理的なものからは癒されない。むしろ、一見すると不合理にみえるものからしか癒されないとさえ思う。たとえば「がんばってりラックスしようとしてもできない」ように、努力して癒しを得ることもまたできないと思う。だから全身を他人に委ね、受け身的に何かをしてもらうことでこそ癒されると思う。アロマの匂いも温泉に浸かるのも、ペットとじゃれあうのもそうである。このとき「がんばり」を捨てて自分の「心」を解放することが大切である。さらに人と関わる中で癒しを得ることができれば、質の高い癒し効果が得られるだろう。

このように「癒し」とは身体的にも精神的にも社会的にも全体として健康を回復することである。全体を回復させて統合させることが、癒しにとって必要不可欠であり、そのためには手当ては最大の武器となる。それに対して「治療」は身体の部分的な異常に対して、その原因を除去することにより正常な機能を回復することであり、心理的・社会的要素は除かれている。そのため深い満足感や生きている実感は得られない。人と人の肌の接触により皮膚感覚を取り戻し、心と体をつなぐ方向性をもつ技こそが、現代に生きる私たちに求められている。

手当てのもたらす効果の第2は「絆^{きずな}」である。

手当ては同時に「ふれあい」としての側面ももつ。ほとんどの哺乳類は、仲間同士で身体を接触させて親密な関係を築いてきた。頭をくっつけたり、体をすり寄せ合う動物もいる。そして手が器用に使える霊長類に進化して

からは、相手に直接手で触れるようになる。グルーミング(毛づくろい)である。人間も遺伝子としてはその99%はチンパンジーと同じだという。

「頭」で了解し合うつながりではなく「心」の通じ合う交流をするためには、「ふれあい」は強力なツールとなる。

メールに代表されるネット上でのつながりは、そのほとんどが文字情報のやり取りである。それは「頭」から入る情報である。書かれている文の意味を理解しなくては成立しないからである。メールのメッセージを読んで解釈して、「うれしい」とか「不快だ」と感じるだろう。文の意味を理解すると、その下の「感情」が生まれるのだ。これはトップダウン式の感情であり、「冷めた感情」でもある。つまり心の底から沸き起こるような喜びや愛情、怒りといった体を震わせるような感情ではなく、あくまで何となくそのような感じがする、というレベルに留^{とど}まったものであることが多い。

一方、面と向かった交流は、相手の表情をみたり、声を聞いたりするコミュニケーションであるため、「感覚」から入る情報のやり取りであり、それも感情を生む。その場合の感情は前記の「冷めた感情」であることもあれば、これから述べるような「熱い感情」であることもある。

「ふれあい」は皮膚と皮膚の接触であるため、「体」から入る情報であり、それは皮膚感覚という身体感覚を生み、さらにそれが感情を生む。こちらはボトムアップ式の感情であり、「熱い感情」である。これは「触れ——触れられる」ことから感じられる快や温かさといった感覚から、親密感や優しさ、愛情、信頼感といった感情が生まれるのであり、体に根ざした感情であるといえる。それは容易には変わることのない、身体に深く根ざした感情である。このようなふれあいは深い信頼や愛情に基づいた「絆」を作り、

それを取り戻すことは何よりも、現在の日本人に特に必要だと思う。

(山口創『手の治療力』による)

注1 Physa——ピュシスまたはフュシス。自然、ものの本来あるがままの姿を意味する古代ギリシャ語。

注2 ルネ・ラエネク——1781年～1826年。フランスの医師。1816年に聴診器を発明し、胸部の診察方法を考案。

注3 エドワード・ドナル・トーマス——1920年～2012年。アメリカ合衆国の内科医。白血病の治療法として骨髄移植を開発した。1990年にヨセフ・マレーと共にノーベル生理学・医学賞を受賞。

注4 ウィルヘルム・コンラート・レントゲン——1845年～1923年。ドイツの物理学者。1895年にX線を発見し、1901年第1回ノーベル物理学賞を受賞。

注5 日野原重明——1911年～2017年。医師。1995年の「地下鉄サリン事件」で聖路加国際病院の院長として、通常業務をすべて停止して被害者の治療のために開放し、陣頭指揮を執った。

注6 川嶋みどり——1931年生まれ、看護師、看護学者。2007年にフロレンス・ナイチンゲール記章受章。

注7 アセスメント——介護対象者の状況を評価・判断すること。

注8 サチュレーション——酸素飽和度。動脈の赤血球中のヘモグロビンのうち、酸素と結合しているヘモグロビンの割合。正常値は96%～99%。

1 傍線部ア「患者不在の医療へと突き進んでいく」とあるが、それはなぜか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

① 聴診器やレントゲンのような機器に対する不信や恐怖心がなくなり、患者が進んで自らの症状の情報を求めたり提供したりして医学に貢献するようになったから。

② 患者の症状を告知に頼っていたときは難しかったが、19世紀以降知覚的な情報を機器によって綿密にとることができ、これを今後蓄積していくことが求められるから。

③ 患者の深部まで分かるような触診の技術は一部の熟達者にしかできなかったところに触手療法が確立したことで技術が多くの医者に浸透してきたから。

④ 観察と触診によるヒポクラテスの医療が発達したものの、一方で精神的な支えとして魔術や儀式を行う伝統的方法が完全に消えることがなかったから。

⑤ ヒポクラテスの観察法や患者の症状の告知に限界を感じていたが、そこに聴診器やレントゲンという機器による分かりやすく客観的な情報を得られたから。

2 傍線部イ「サイエンスとアートの両方を身につけるべき」とあるが、「サイエンス」と「アート」とはここではどういう意味か。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

① サイエンスとは細胞のような病原の細部に分け入る高度な医療分析であり、アートとは患部の全体を見て治療までの治療方針を考える総合処方である。

② サイエンスとは多くの情報から科学的に帰納して得た医学的成果であり、アートとは患者個々の病気を繊細な医者感性で捉えた経験の集約である。

③ サイエンスとは病に共通する医学的な知識やテクニックを知ることであり、アートとは各患者の状態や気持ちに応じてそのような科学による成果を使うことである。

④ サイエンスとは積極的に科学的な医学療法を施すことであり、アートとは患者自身の自然な治癒力を尊重してあまり技術的な治療を施さないことである。

⑤ サイエンスとは患者の告知に惑わされないように客観的な測定値を元にした治療であり、アートとは患者の主観的になりやすい痛みや苦しみの情報の共通点を探す手法である。

3 空欄

X

 に入る言葉として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

① 共感を抱いて

② 同情心を尽くして

③ 五感を駆使して

④ 直感を信用して

⑤ 想像力を働かせて

4 傍線部ウ「次のような実例を紹介」とあるが、どのような実例として紹介されているのか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

① 看護におけるデータを重んじた機械的な対応のみで、患者の苦しみや不安に向き合わない実例。

② 看護師も先進機器を使用して情報を記録して、医者と協力し合うことを重視している実例。

③ 看護においても清潔さを徹底するために、患者の肌に触れて脈診するような接触をしない実例。

④ 看護師による未熟で不安定な情報ではなく、機器によって緻密な情報を確認するようになった実例。

⑤ 看護師は患者の訴えをパソコンで記録するが、対応は慎重に行うようになった実例。

5 傍線部エ「看護の原点について考えてみたい」とあるが、筆者は看護の原点をどう考えているか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

① 患者の感情も個人的情報として他に漏らさないようプライバシーを遵守すること。

② 互いに理解しあえる患者同士に緊密な人間関係を形成する助けとなること。

③ 物理的な助けより、患者の気持ちや苦痛に同情し共感することを本質とすること。

④ 機器の使用できない事態に備えて手によるアセスメント能力を常に磨いておくこと。

⑤ 患者の人間性を精神のありかたに見いだして誠意をもってその尊厳を守ること。

6 傍線部オ「人々は「治療」よりも「癒し」を求めるようになった」とあるが、それはなぜか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

① 単に身体的に病気や患部を正常に治すだけの医療行為には満足されず、精神的な充足と身体的回復を共に得て双方が調和された状態を望むようになったから。

② 頑張ったり努力して健康を取り戻すのにもはや疲れ果ててしまい、人でも物でも他の力を借りて受け身で健康になり、社会に復帰したいと考えるようになったから。

③ 医学は際限なく問題が起きていつまでも解決にはつながらないことに落胆し、合理性がなくても他人の温かみを実感できる接触療法に希望を託すようになったから。

④ 科学的なものへの絶対的信頼が薄れ、科学に支配された冷たい治療より太古からある手技による療法の方が人体の本質をつかんでいると感じ始めたから。

⑤ 身体的に正常に戻ることが重要だと医療では考えるが、精神的に健康にならずには身体も回復しないことを悟り、真の意味での生の充実を得ようとするようになったから。

傍線部カ「手当てのもたらす効果の第2は「絆」である」とあるが、筆者は「手当て」と「絆」にはどのような関係があると考えているか。最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 「手当て」が施されると人は快感を感じ、そこから他者に向けた愛情や信頼を育む余裕が生まれ、やがてそこから「絆」と呼べる普遍的な感情に発展する。
- ② 「手当て」をすることで伝わる身体的な刺激は、文字情報と同じく様々な感情をわき上がらせ、「絆」という強固な感情の絡み合いを生み出す。
- ③ 「手当て」はトップダウン式に行われる強制的な接触で、それにより人間の動物的な本能を目覚めさせ、哺乳類が必要とする「絆」を核とした社会を形成することができる。
- ④ 「手当て」は自ずと他者と肌を触れあうことになり、ネット上でのやりとりでない温かな身体的な接触に、深い精神的な感情が生まれ、「絆」という人間同士の強い結びつきにつながる。
- ⑤ 「手当て」は身体に直接働きかけるため、頭で理論思考をする間もなく感情を揺さぶり、身体に根ざすゆえに簡単には変わらない「絆」を必要とする。

二

次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

火山の火口に近い場所にあるバラック小屋で、驟雨しゅううの接近にいち早く気づいた老犬はバラック小屋の軒下に横たわった。老犬の主は、販売用の高山植物の鉢をしまい、寝てしまう。そこに、青い車に乗った若い男と、火口を見てきた若い女性が雨宿りしに来る。

若者と娘はひっきりなしに喋りしゃべ、今では互いの立場に話題が及んでいた。ふたりには共通点がいくつかあった。地元の間人ではなく、都会からやってきたこと。日帰りの予定であること。接し方は違っても山が好きなこと、親元を離れてアパート暮らしをしていること。働いていること。そうしたことがわかってから、娘はいくらか気を許した。その証拠に、彼女はナツザックからアンパンを取り出して、若者にひとつ分けてやったのだ。すると若者はとても喜び、いきなり雨のなかへと駆け出して行った。そして自分のクルマから缶入りのジュースを持ってくると、アンパンのお返しに一本を娘にやった。

「正直に言いますとね」若者はアンパンをほおばったまま言った。「ぼくは会社を辞めてしまおうと考えているんですよ」

その理由について彼は三つほどあげた。仕事の内容が単調過ぎる。「犬だつてやれますよ、あんな仕事は」職場の対人関係にうんざりした。「馬鹿ばかりでね」給料が安い。「ボーナスがなかったら、とつくに飢え死にしますよ」

「やりきれませんね」と若者は言った。「わかりますか、この気持？」娘は返事をしなかった。しかし若者はつづけた。

「世の中つて案外つまらないんですね」と彼は言ったのだ。「退屈なんですよ。ぼくはもつと面白いんじゃないかと考えていたんですがねえ」娘は思い切り上体を反らして残りのジュースを一気に呑み干し、しばらくのあいだ空き缶をしげしげと見つめていたが、やがてこう言った。

「自分で面白くすればいいでしょ」

「もちろん考えましたよ」若者はひどく陰気な表情をつくった。「今だつて考えてます。無理をしてまであの中古のクルマを買ったのだからめだつたんですがね」

「羨ましいわ。わたしには買えないもの。毎月実家に仕送りしなければならぬのよ」

「どうしてもクルマに夢中になれないんです、ぼくは。残ったのはローンの支払いだけでね」

娘は遠くに眼をやりながら、訊いた。

「お友だちがいらないんですか」

ア 若者にとつてその質問はちよつとした奇襲だった。彼は束の間うろたえ、答えられるようになるまでには更に時間がかかった。

「友だちですか。いることはいますよ」と彼は言った。「いっしょに酒を呑んだり遊んだりしますよ。それでもつまらないんです」

「わたしにはいいわ。ひとりも。それでもつまらないなんてことはないわね」と娘はおとなびた口調で言った。「毎日毎日面白くてたまらないわ」

「本当ですか、それは？」

「本當よ」

若者は相手の顔を覗きこみ、低い声で唸ってから、こう訊いた。

「面白いといっても毎日がほとんど同じなんでしょう？」

「どうしてそんな風に考えるのかしら？」

「たとえばこの一、二年のあいだに何か面白いことがありましたか？」

「いっぱい」

「面白くて面白くてたまらないなんてことが一度でもありましたか？」

「その面白いつてどういう意味なの？」

「時間が経つのも忘れて、しまいには自分のことも忘れるほどの面白さですよ」

「いつだってそうよ」

「今も？　こうやって雨のなかでバスを待っているときもですか？」

「ええ、話し相手もいるし」

「ぼくがいなかったら？」

「そこに犬がいるじゃない」

「信じられないなあ、そんなこと」

「わたしだって信じられないわ」

「ぼくのことか？」

「日曜日にドライブできる身分でつまらないなんて」

「そうですかね」

「そうよ」

そこでふたりの会話は跡切れた。若者は何か言いかけてやめ、娘は左腕

を伸ばして老犬の頭を撫でた。老犬は申しわけ程度に尾を振ったが、すぐにやめてしまい、大あくびをした。

「いいですね、この犬は」と若者は言った。「気楽なもんだ。自由だし」

「どうかわからないわよ。この犬にだっていろいろ悩みがあるかもしれないわ」

「きっとぼくは、自分で自分をどう扱っていいのか見当さえつけられないんですよ」

「山へでも登って見たら？」

「登ってもどうってことはないんですよ。疲れるだけで」

「登らないうちにわかるの？」

「わかります」若者はきっぱり言った。「自分のことなら十年先のことだって、二十年後のことだってわかります」

「まさか」

「わかりっこないですよね」若者は苦笑し、指を弾いてパチンと鳴らした。
「わかるように思えてしまうところがやりきれないですね」

風がやんだ分だけ雨が強まった。どしゃ降りの雨が時間をかき乱し、すっかり狂わせてしまっていた。それでも老犬は落ち着き払って、まどろみの安楽を享受していた。朦朧とした意識の彼方にあるのは、十七年間いっしょに暮らしてきた主の規則正しい癖と、元気いっぱいだった頃の日日だった。当時は四六時中緊張がつづいていたものだ、と老犬は思う。他人の気配を感じた途端に素早く起きあがり、更に相手が近づいてくるようなことがあれば、顔を地面すれすれまで寄せて身構え、必要な場合には牙をむいたりしたものだ。

A

主は、首輪と杭のあいだを丈夫な鎖で結んでしまった。しかし満月の夜ともなると、若い牡犬おすいぬは何時間もかけて穴を掘り、遂には杭を引き抜いた。そして、鎖と杭を引きずりながら、夜が明けるまで、血の騒ぎが鎮まるまで、あちこちうろついた。あの頃、敵の数はとても多かった。大半の牡犬が敵だった。味方などいなかった。また、主以外の人間もすべて警戒しなければならぬ相手だった。

いや、主といえどもときには例外でないことがあったのだ。主はある年の夏に家族に見限られ、ひとりぼっちになった。それから酒ばかり呑んで暮らすようになった。酔っぱらうたびに暴れた。反対に殴り倒されて、鼻血を出して帰ってくることもあった。しかし、それはもう十年前のことであった。

若者と娘はまた喋りだした。バスがくるまでにはあと一時間もあった。

「どちらかといえば、ぼくは大学へ戻りたい心境ですよ」と若者はしみじみとした調子で言った。「あの頃はよかったなあ。夢だなあ、あの四年間は」

「くだらなかつたわ、学校なんて」と娘は言った。「今のほうがずっとましよ」

「そうかなあ」と若者は呟つぶやいてから、軽く眼を閉じ、ややあつてこう言った。「本当はあなたもぼくみたいに焦っているんじゃないのかなあ。たとえば早くいい相手を見つけて結婚しなければなんて、いつも考えているんじゃないんですか？」

娘は鼻先で笑い、「どうかしらね」と言い、そっぽを向いた。

「それとも」と若者はつづけた。「それとも結婚して家庭におさまってし

まう前に精いっぱい遊ばなくちゃあ損だと考えているんでしょう？」

「さあ、どうかしら」と娘はもう一度言ってから、持っていたジュースの空き缶を地面に落した。ついでその上に足をかぶせた。キャラバンシューズに少しづつ体重が加えられ、やがてそれはべしゃんに潰れた。「やはり一度山へ登ったほうがいいわね。クルマじゃなくて、足を使って」山なんか登ったところでどうってことはないでしょう」「あるわ」と娘は真つすぐに若者の顔を見て言った。「恐ろしいんでしょう？ 恐ろしくてひとりで山に入れないんでしょう？ だからそんなこと言うんでしょう？」

「まさか」若者は真顔になった。「このぼくがまさかあ。こう見えても学生せいせいの頃は太抵のスポーツをこなしたもんですよ。体力なら誰にも引けはとりません」

「体力だけでは登れないわ」

「ほかに何が？」

「長い時間ひとりでいられるかどうか……」

「この二年間ぼくはずっとひとりでしたよ」

B

ふたりの会話は跡切れた。若者はひっきりなしにタバコをふかし、娘は口を真一文字に結んで雨を眺めていた。そして老犬は、相変らず天候に左右されない時間と空間とを確保していた。

現在の老犬の生活は毎日が静かだった。他人に向つてむやみに吠ほえたりすることもなかったし、鎖につながれていなくても夜中に走りまわったりしなかった。いかんともしがたい力にはげしく振りまわされるようなことは、すでになかった。もはや老犬は何も待っていないかった。ちょっとした変化も刺激も望んでいなかった。餌の時間さえ待っていないかった。

それは老犬の主にしても同様だった。十年前の彼ではなくなっていた。たまに酒を呑むことはあっても、誰かをつかまえて両腕をブンブン振りまわすためではなかった。彼はもう腹を立てることがなかった。観光客が鉢植えの高山植物を値切りに値切っても、彼はにこやかな笑みを決して絶やさなかった。そして暇さえあれば眠っていた。死んだときの練習でもするように、ぐったりと眠った。かつての古い仲間とばったり出会ったときなど、彼は老犬の頭を軽く叩きながら、こう言うのだった。

「こいつもおれもおしまいだよ」

あるいはこうだった。

「死んだ火山のようなもんだ」

若者は突然立ちあがって言った。

「わかりました」と言い、「登ってみせればいいんでしょ」とつづけた。

「みせなくたっていいのよ」娘は笑いたいのを我慢していた。「山登りなんて誰にもみせなくていいのよ。自分のために登るんですからね」

「この場合は違います。ぼくは今勇気を疑われているんですからね。臆病者でないことを証明しなくては」

「お好きなように」

「もちろん。火口をよく見てきて、その説明をすれば証拠になるでしょう」

「わたしに証明などしなくていいわ。自分にするだけで」

「待っていてくれますか、ここで？」

「五時のバスで帰ります」

「困るんだなあ、それでは」

「危険よ、今からでは」

「かまうもんですか」

「この雨では無理だわ」

「平気です」

「その靴で登れると思ってるの？」

「裸足でも大丈夫です。山なんて土砂のかたまりですよ」

娘はとうとう吹き出した。甲高い声を遠慮なく張りあげて、しばらくのあいだ笑っていた。

「男のひとって」と彼女は言った。「男のひとってどうしてみんなそうなの？　むきになるのよね」

「ぼくが誰と同じだって言うんですか？」

「そっくり」

「いつもそうやって男を笑いものに行っているんですね」若者は本気で怒っていた。青ざめた顔が震えていた。「誰にも好かれませんよ、そんなひとは」

「お互いさまでしょ」

「ぼくは違いますよ」

「さあね」

「山に登りたがる女のひとって男にもてないからだって、世間の連中は言ってますよ」

「日曜日にひとりでこんなところへドライブにくる男のひともね」

C

ふたりのあいだに長い沈黙がはさまった。若者は立ち尽くしたまま腕組みをし、娘はベンチの背もたれに両腕をだらしなくあずけて黙

りこくつていた。老犬はといえば、懈怠^{けたい}の時の流れのなかにあって、うつとりした眼つきで水しぶきに覆われた広い駐車場を眺めていた。それでも老犬の四肢がまるで駆けているときのようにピクピク痙攣^{けいれん}するのは、まだ元氣だった十年前の余韻のせいだった。つまり、じっとしていることを知らなかった時代の断片が、波のように次から次へと押し寄せてきては老犬の胸のうちを静かに横切っていたのだ。

依然若者は立ち尽くしていた。彼はためらっていた。いや、すでに山へ登る気持はすっかり失せていた。あたりはますます暗くなり、雨の勢いも衰えていなかった。意を決しようとするたびに彼は脚の力が脱けてゆくのを覚え、後退するのだった。だから、ややあって彼は逃げ出す口実を考え始めた。相手に決定的なダメージを与える捨てぜりふについても考えた。それを娘に叩きつけてから自分のクルマに飛び乗り、さっさと山を下りてしまう方法しか今や残されていないと思った。D、彼はうまい口実も効果的な捨てぜりふも思いつくことができなかった。

やがて娘は言った。

「要するになんでしょ。あなたはこのわたしをあのクルマに乗せたいんでしょ？」

若者は一瞬顔をこわばらせ、それから不自然な笑い方をした。しかし娘は容赦なく追い打ちをかけた。

「そしてどこがおかしなところへ連れて行こうと考えてるんでしょ？それに成功すれば、すっかり満足して、明日からまたお勤めに出かけることができて、お友だちといっしょに騒いで暮らすことができるんでしょ？その程度の不満なんでしょ？」

若者はすかさず反論しようとしたが、あまりの興奮のために口ごもるばかりで、結局一言も返せなかった。青いクルマへ逃げこむことすらできなかった。

「いいのよ」と娘は元通りの穏やかな口調で言った。「いいのよ、もう。わたしにはわかってるわ。全部わかってるわ」

若者は娘を見た。彼女は顔を伏せていた。

「わたしだって同じなのよ。何をしたいのかわからないのよ。淋しいし、退屈してるのね。ただそれだけのこと」

娘は泣いていた。若者はゆっくりとベンチに腰をおろした。

しばらくして、雨に雷が介入した。火口のあたりに太い稲妻が走り、それが灰色の大気をハッ裂きにしたかと思うと、ほとんど同時に轟音^{ごうおん}が大地を圧した。バラック小屋のトタン屋根や窓ガラスがビリビリ震えた。レストハウスの方から従業員の悲鳴が起った。つづいてまた重々しい音がところかまわずころがりまわった。

若者は恐怖のあまりただ茫然とするばかりで、しかし娘は腕時計を外すやいなや地面に伏せた。動揺をみせなかったのは、老犬と老犬の主のみだった。老犬は強烈な光と音の乱舞をチラッと一瞥^{いちべつ}しただけだったし、主は主で規則正しい軒をやめなかった。

駐車場の周辺で雷雲が暴れているあいだ、若者と娘はまったく動けなかった。悲鳴^エをあげることもできなかった。空き缶に落雷があつて、バラック小屋のすぐ前で巨大な火柱があがった。

はげしい雷雨のなかで、老犬は本当に眠ってしまった。

オ 夢さえ見ないで、ぐっすりと眠ったのだ。そして老犬が眼を醒^さましたと

きには、雨は小降りになっていた。主はバラック小屋に鍵を掛けているところだった。老犬はむっくりと起きあがり、思い切り伸びをして大あくびすると、ベンチを見た。だが、そこにはもうさっきのふたりはいなかった。わずかに体臭だけが残っていた。青いクルマも消えていた。

最終のバスが登ってきた。しかし待っている客がひとりもいなかったの
で、すぐに引き返して行った。

(丸山健二「雨の火山」による)

注1 バラック小屋——簡易な建物や仮小屋、粗末な家屋。

※本文中には、現代では使用されていない表現が用いられているが、
原文を尊重し、原文通りの記載とした。

8 傍線部ア「若者にとってその質問はちょっとした奇襲だった」とは、こ

の場合どういうことか。その説明として最も適切なものを、次の①～

⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

① 今まで素直に日常の不満を聞いてくれていると思っていた娘から、
突然自分の足りない部分を指摘され驚いたということ。

② 今まで黙って話を聞いていた娘が、突然話し出したため、その非
日常の光景に驚いたということ。

③ 若者にとって、自分のクルマの自慢をしている最中に、友人関係
の話を聞かれ、話の腰を折られて傷ついたということ。

④ 若者にとって、論理的に自らの問題を語っていたにもかかわらず、

直感的に欠点を突かれたため、論理が破綻したということ。

⑤ 若者にとって、戦争への憧れは必要不可欠であり、その話題を変
えられたことは奇襲同然だったということ。

9 傍線部イ「わかるように思えてしまうところがやりきれないですね」

とは、どういうことか。その説明として最も適切なものを、次の①～

⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

① わかりもしないのに、わかったように思えてしまう勘違いを直せ
るのは大学教育しかないということ。

② わかりもしないのに、わかったように語ってしまう自らの愚かさ
に腹が立つということ。

③ わかりもしないのに、自分の未来が決定してしまっていることが
理解できてどうにもならないこと。

④ 退屈な仕事にこの休日が終わったら戻らなければならないのが、
今が面白いだけに収まりがつかないということ。

⑤ 退屈な日常がこれからも続き、自分の未来に変化がないと予想し
て諦めてしまうことが辛抱しきれないということ。

10 空欄 A D のそれぞれに入る言葉の組み合わせとし

て最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号を
マークしなさい。

① A それから B しかし C だから D またしても
② A またしても B それから C しかし D だから

- ③ A だから B またしても C それから D しかし
 ④ A しかし B だから C またしても D それから
 ⑤ A またしても B だから C しかし D それから

11

傍線部ウ「じつとしていることを知らなかった時代の断片が、波のうに次から次へと押し寄せてきては老犬の胸のうちを静かに横切っていたのだ」という部分はどのようなことを描写しているか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 若者たちの現在の自分に不満を感じ、寂しさを感じ、日常を退屈にとらえる発想に対して、老犬は、自らは常に闘っていたとして若者の抵抗に共感を覚えている。
 ② 若者たちの逡巡^{しゅんじゆん}し、日常を退屈にとらえ、脱出口を求めて右往左往する様と、すでにその時期を過ぎ、落ち着いている老犬の様子が対比的に描かれている。
 ③ 若者たちの会話を聞いていて、自らもそのように悩んだ過去があることを思い出し、老犬は青春の悩みの中にあつた過去の回想に逃げ込んでいる。
 ④ 若者たちの会話劇を聞く中で、追い詰められていく若い男に同情し、老犬は、自らの過去の中で、若者を救う手段はないか考えている。
 ⑤ 若者たちの日常に対する諦めの感情と対比して老犬の過去の戦いの日々が、勇ましく輝かしい過去、あるべき姿として描かれている。

12

傍線部エ「悲鳴をあげることさえできなかった」のはなぜか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 自分たちの日常空間の中で何の不都合もなく、受け容れられる悩みを抱えてはいたが、自分たちの日常空間とは異なる空間の、雨と落雷によって悩みが吹き飛ばされ、恐怖で身がすくんでしまったから。
 ② 火口に登ることなど簡単だと思って、これから登山をしようと考えていた若者だが、実際には山の天気は変わりやすいものであり、突然の雷雨によって、自然とは恐ろしいものであることを学んだから。
 ③ 目の前に雷が落ちたことによる恐怖のあまり、若者二人は足がすくんでしまい、地面に倒れこみ、その衝撃で言葉を発することのできる状況ではなかったから。
 ④ 今まで若者どうしで会話をしていたため、雷の接近に気が付かなかった若者二人は突然の雷雨の発生があまりに意外であり、悲鳴をあげる時間すらなかったから。
 ⑤ 会話を雷によって中断させられた若者二人は、最もよい状態であつた会話を止めた雷雨に対する怒りのために声も出せなかったから。

13

傍線部オ「夢さえ見ないで、ぐっすりと眠ったのだ」とあるがそれはなぜか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 落雷や豪雨に象徴される自然の力の前には、何もすることはできないという経験則に基づき、唯一可能であった睡眠を行ったから。
- ② 老犬や老主にはもはや夢も希望もないため、理想や向上心に苦しめられることがなく、だからこそ、深い眠りを得ることができたから。
- ③ 自然と一体化した老犬は、雷のエネルギーを自分そのものととらえることが可能となっていたため、雷が落ちれば落ちるほど元氣になつていったから。
- ④ 老犬や老主にとっては、激しい雨や雷といった自然の激しさに象徴される人生の荒波はすでに経験済みのものであり、驚くべきものではなかったから。
- ⑤ 老犬や老主は老いのために耳が遠くなつており、雷の音が聞こえず、そのために軒をかいて深く眠ることができたから。

14

本文の説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 若い男女の淋しく、退屈で、何をしてもいいかわからないという悩みは、老犬にとって臭いが残るのみで、大自然の雨と雷の中であたかも消されてしまったようであった。
- ② 雷に打たれて、若い男女は消滅してしまったと考えられる。しかしそのようなことは自然界では起こりえることであり、老犬にとって気にすることではなかった。
- ③ 老いた老犬は目がほとんど見えないため、若い男女が徒歩で去ったことが嗅覚によって理解できた。そのわずかな体臭を懐かしんでいるのであった。
- ④ 老犬が見聞きした若い男女は、日常がずっと続いていくことに飽き、人生の目標の無さに淋しさを感じていた。しかし雷によって彼らの人生はリフレッシュされたのであった。
- ⑤ 山の中ではしばしば怪異的な現象が起こるものであるが、体臭のみが残っていたということは若者たちが青いクルマに乗って安定した日常に帰還したことを示し、老犬は安堵した。

三 次のA～Dのそれぞれの設問に答えなさい。

A 15・16の各文のカタカナの傍線部を漢字に改めたとき、それと同じ漢字を傍線部のカタカナに含むものはどれか。最も適切なものをそれぞれ後の①～⑤の中から一つずつ選び、その番号をマークしなさい。

① 夜中に台所でソッキョウの詩を書いた。

② あまりの苦痛にゼッキョウした。

③ 県と県のサカイに住む。

④ 新たに国がオコる。

⑤ 陸上キョウギカイで最高得点を出す。

⑥ 本の間に手紙をハサむ。

16 ナマリ色の空からみぞれが降ってくる。

① エイエンの時間があつたらと考える。

② アエンの含有量を計算する。

③ 雨で試合がエンキとなる。

④ 薬で皮膚のエンシヨウを抑える。

⑤ 知り合ったのも何かのエンと考える。

B 17・18の各文の傍線部を漢字に改めたとき、その漢字の部首は何か。最も適切なものをそれぞれ後の①～⑤の中から一つずつ選び、その番号をマークしなさい。

① 近所の店でセツトウ事件が起きた。

② うかんむり

③ くさかんむり

④ たけかんむり

⑤ あめかんむり

⑥ あなかんむり

18 明日の試合はクブクリン勝つことができるだろう。

① まだれ

② とだれ

③ しかばね

④ がんだれ

⑤ やまいだれ

C

19 22 の各文の意味を持つ表現として最も適切なものはどれか。

それぞれ後の ① ⑤ の中から一つずつ選び、その番号をマークしなさい。

19 ある人・物やある側を援助したり特別に扱ったりすること。

① 肩をぬく

② 肩をこす

③ 肩をいれる

④ 肩をかける

⑤ 肩をすぼめる

20 得るところより失うところが多いこと。

① 鼻を欠く

② 鼻を折る

③ 鼻を明かす

④ 鼻を利かす

⑤ 鼻を鳴らす

21 この上なく大切にして従うべききまり。

① 竜頭蛇尾(りゅうとうだび)

② 深山幽谷(しんざんゆうこく)

③ 森羅万象(しんらばんしょう)

④ 冠婚葬祭(かんこんそうさい)

⑤ 金科玉条(きんかぎよくじょう)

22 物の価値や人の力量などを計る基準となる物事。

① 暗々裏(あんあんり)

② 必需品(ひつじゅひん)

③ 雰囲気(ふんいき)

④ 金輪際(こんりんざい)

⑤ 試金石(しきんせき)

D 次の文章の空欄 23・24 に当てはまるものとして最も適切なものは

どれか。それぞれの ① ⑤ の中から一つずつ選び、その番号をマークしなさい。

一九〇〇年、現在の大阪府に生まれた 23 は、陸軍士官学校を中退後、第三高等学校、東京帝国大学へと進学した。「詩と詩論」四季「文学界」などに参加。抒情詩人として活躍する。一九三〇年に第一詩集 24 を刊行。日本語の伝統を近代詩に生かし、昭和詩壇の代表的な詩人となる。

23

① 小川未明

② 萩原朔太郎

③ 中原中也

④ 草野心平

⑤ 三好達治

24

① 『測量船』

② 『赤い船』

③ 『月に吠える』

④ 『山羊の歌』

⑤ 『第百階級』

(以上で問題は終わります。解答票の解答番号 25 以降は使用しません。)

